

## 与謝野晶子の肖像 児童文学を軸にして

宮澤 健太郎

はじめに

与謝野晶子といえば与謝野鉄幹を、鉄幹といえば「明星」を思い起させる。そして「明星」といえば浪漫主義短歌の急先鋒の短歌雑誌としても知られる。明治の20年代、30年代から生き抜いた熱烈な女流歌人としてこの雑誌で活躍した晶子は実にたくさんの子どもを生んで育てた。明治の40年代には時勢の流れに乗って、子ども向けの童話や童謡もものした。ここではこの歌人がいかにして子ども分野に進出したのかを明らかにしたいとおもう。

与謝野晶子とは

晶子、本名 鳳（おおとり）しようは一八七八（明治11）年12月7日、大阪府堺市甲斐町の菓子屋、駿河屋に生まれた。兄と弟と妹がおり、その他に異母姉二人がいた。幼いときより古典や史書に興味を持ち8歳の時、樋口朱陽の漢学塾に入ったりもした。11歳で店の帳簿をつけたり地唄、琴、三味線、踊りなども習っていたという。14歳で堺女

学校補修科を出て独学で古典の勉強をしながら、地元の短歌会に短歌を投稿したり、関西青年文学会の会誌「よしあし草」に新体詩をのせたりした。一九〇〇（明治33）年には出来たばかりの東京新詩社が4月に創刊した「明星」に投稿、熱烈な与謝野寛（鉄幹）信奉者となった。7月には上京、逆に鉄幹も8月に大阪に入り、同じく信奉者だった若狭の山川登美子と三人で京都、永観堂で紅葉を見て栗田山で一泊。山川との恋の三角関係からその贈答歌の競争に勝ってその秋、実家の反対を押し切って鉄幹と結婚することになった。創作活動はいよいよ凄まじく「みだれ髪」（明治34年8月、東京新詩社）をもってその地位を確立した。23歳のことである。明治35年（24歳）長男、光の誕生の後、合わせて四男五女を儲けた。明治41年ごろより「絵本お伽噺」を刊行し、明治43年にはお伽噺「少年少女」を刊行、自らも童話を書きはじめた。一方では「源氏物語」を訳したり短歌や評論も書いた。明治35年には小説「雲のいろいろ」を書くなど活発に活動し、パリに留学した夫、鉄幹を追いパリに出かけた。（この後生まれた子ども名前にはアウギュスト（四男、大正2年）、エレンヌ（五女、大正3年）といった洋風の名前もつけた。古典もののは、紫式部や和泉式部さらには徒然草、栄華物語に及んだ。大正4年には童話「うねうね川」を刊行。大正8年には童話「行って参ります」（天佑社）を刊行。大正14年童話「藤太郎の旅」（「行って参ります」改題）刊行。昭和2年「モリナガ・エホン」刊行。晶子57歳（昭和10年）の時、鉄幹肺炎で死去。一九四二（昭和17）年5月29日、狭心症で死去。64歳。号は小舟、白萩。

## 短歌の境地

晶子といえやはり浪漫主義短歌があげられる。明治20年代後半にはすでに円熟の境地に達したと新聞進一は述べ

ている（日本近代文学大事典、講談社、昭和52）。新聞のえらぶ歌をあげて解釈してみよう。

春ゆふべそぼふる雨の大原や花に狐の睡（ぬ）る寂光院

「小扇」明治37／1 26歳

京都大原といった優雅な現場に雨さえもそぼ降っている春の夜。こんなあまりにも情趣ゆたかな寂光院の桜の花のもとに、このあたりに住む狐もうっかりねてしまおうといったそんなゆったりした詩情が溢れている。

友禪の袖十あまり円（まる）うより千鳥さく夜を雪ふり出ぬ

「毒草」明治37／5

京友禪を着た女人達のまるくなつての踊りの最中、遠くから聞こえて来る千鳥の舞の歌、ふと外を見れば雪さえちらちらと落ちて来る。なんという幻想的で優雅で王朝的な光景ではないだろうか。

地はひとつ大白蓮の花と見ぬ雪の中より日のぼる時

「夢之華」明治39／9 28歳

一面の雪景色、そこに朝日ののぼる光景はまさにそれは大きな白い蓮の花のようだ。

いずれも幽玄で情趣的で、それでいて透明感に富んでいて、決して恋の歌ではない。「絢爛」という言葉を新聞は用いるが、友禪のところではそれがあてはまっていよう。いわゆるこういった趣味を晶子調というわけだが「明星」ではこの雰意気が明星調ともよばれた由縁だ。

このようにして一世を風靡した晶子にはいろいろなメディアからの短歌選者の依頼や吟行の問い合わせが殺到した。

上述のごとく晶子の作風は更に進化し相聞的な熱烈なものに変化してゆく。

鎌倉の由比が浜べの松もきけ君とわれとは相おもふ人

「佐保姫」明治42／5 31歳

鎌倉の由比が浜で待つてくれているあなた、そのことを浜の松も聞いてくださいよ、あなたのことが大好きよ。

湯槽（ぶね）にてわが枕する腕（ただむき）は望の月夜も及ばぬものを

「青海波」明治45／1 34歳

わたしが湯舟でああなたの腕をまくらに窓からみえる満月をみていますがこれは満月なんかよりずっといいわよ

なんと大胆でそれでいて情の溢れるような短歌ではないか。どちらかと言えば、それはエロティックでもあろう。

大正時代になると短歌もだが詩やエッセイ、さらには小説（「明るみへ」東京朝日、大正2／6／5—同／9／17）

古典の新訳、吟行、講演会も多くなった。この時代にものした口語自由詩の誌風は自然美の礼賛、生活苦、社会や政治への批判、風刺も取り込んでいった。

### 晶子と児童文学とのかわり

晶子が児童文学畑に足を踏み入れたのは一九〇八（明治41）年、晶子30歳の時のことである。その前年3月に双子の女子を生んで、この年に突然「絵本お伽噺」を刊行したのだ。明治43年8月には駿河台から麴町に引っ越し、9月

にお伽噺「少年少女」をも刊行したのである。前の年には三男、麟も生み、子どもは合わせて六人（大正9年までに九人）、他方で資金の源、主力の「明星」も瓦解し解散してしまった（明治41年11月）今、鉄幹の人望も落ち、晶子もお金には相当こまっていただろう。懸命に自宅講演会や文学会の講師等して多忙な時期だ。このような時に自身の子どもたちの為という、自家用性も含めて児童文学に目をむけたのは、一つには若松賤子などの業績からの感化と、時あたかも英国から入って来たマザーグースなどが竹久夢二や北原白秋などによって翻訳され始めた影響からではなかったろうか。さらに背を押したのは小川未明の童話集「赤い船」（明治43/12、京文社）だったともいわれる。また晶子は外国語の翻訳はしなかったが、古典の現代語訳はお手の物だったから、児童文学の明治期の終焉から（つまりお伽噺の終焉から）新しい児童の文学への挑戦を始めたのではなかったか。何より大事なものは、世間がまだ後期自然主義のブームのまったただ中にこのような仕事に頭を浸そうとしたその柔軟さでなかったろうか。大正年間からめざめたように広がる児童文学をみすえたような晶子の先見性は大変重要だと思われるのだ。

一九一四（大正3/2、36歳）年には童話集「八つの夜」（実業之日本社）を「愛子叢書」の一冊として、一九一五（大正4/9、37歳）年には童話集「うねうね川」（啓成社）、などの創作ものを出したが、大正7年の「赤い鳥」創刊にともなって晶子への注文も少なくなったといわれる。そして代表作「言って参ります」（大正8/5、天佑社、41歳）以後はほとんどない。

### 「愛子叢書」(アイシンウシヨ)の意味

明治時代のイデオロギー中心の児童文学の中心は冒険、立身出世、仁義礼智の思想が跋扈していたが個人思想の移

入、自我の芽生えなどから大正デモクラシーが広まり、自由というのが合い言葉にもなったのである。大正元年の芦屋蘆村の少年文学研究会などの誕生、そして次の年にはいよいよ「愛子叢書」がお目見えする。この叢書については文献が少なかつたが、故・続橋達雄がその書「大正児童文学の世界」（平成8／2、おうふう）の中で精緻に解説したのでかいつまんでそれを繰り返そう。

「愛子叢書」は出版の実業之日本社が自社の「日本少年」や「少女の友」の広告（1912／11／1と1913／2／1）でアイシソウシヨとルビをふって新刊広告を出している。要旨は次の通りだ。

少年少女の読み物としていままで為になるものはほとんどなかった。この欠点を補うため文壇第一流の森岡外、島崎藤村、高浜虚子、徳田秋声、島村抱月、田山花袋、夏目漱石、などにはかつてわが子によませる最善最良の読み物を出すことにした。

そして出されたものは花袋の「小さな鳩」（大正2／3）、藤村の「眼鏡」（大正2／2）、秋声の「めぐりあひ」（大正3／8）、与謝野晶子の「八つの夜」（大正3／6）、野上弥生子の「人形の望」（大正3／8）の五著書。予告からすれば野上と晶子が番外であつた。それらの評価について以下主要部を抜粋する。

○未明氏以外に、文壇人が児童読物に筆を染めた皮切り。（1927／12 山内秋生「日本文学選集2」丸善）

○よい文学を児童に与えんとする動きの現れ。（1952／5 船木枳郎「現代児童文学史」新潮社）

○新しい童話運動も始まらない時代にさきがけての少年少女へのおくりもの。（1954／3 長谷川誠一「日本児童文学

事典」河出）

○文壇人を動員して児童文学の花を咲かせる以前の先駆的な出版。（1955／8 関英雄「日本児童文学大系2」三一書

房)

○児童文学の近代的確立のために、自然主義派の詩人・作家たちの仕事の反映。(1956／4菅忠道「日本の児童文学」大月書店)

○従来児童文学に執筆経験のない文壇人の進出。(1963／11巖谷栄二「児童文学概論」牧書店)

○童話・童謡雑誌の隆盛の前兆。(1963／8鳥越信「日本児童文学案内」理論社)

○「赤い鳥」以前にこうした作品が生まれていることは注目すべき。(1970／3滑川道夫「児童文学事典」東京堂)

○大正期の本格的な創作童話はこれによって始まる。(1970／5岡田純也「近代日本児童文学史」大阪教育図書)

○有本芳水と東草水が編輯に加わり、かつての博文館の「少年文学」叢書をめざしていたらしい。(1973／10鳥越信「子どもの本の百年史」明治図書)

○児童文学の新しい転換が求められていた時期の産物(横谷輝「日本児童文学史の展開」明治書院)

○実業之日本社の記録さるべき一大事業。(1974／10瀬沼茂樹「名著復刻日本児童文学館」)

○博文館の「少年少女文学」よりもその布陣が興味をそそる。(1975／10桑原三郎「赤い鳥の時代」慶応通信)

○俗悪化・マンネリ化した当時の児童文学界に新機軸を入れた。(1976／4西田良子「日本児童文学概論」東京書籍)

○文学としての童話を志向する文壇人の執筆。(1983／6浜野拓也「日本児童文学史」三省堂)

○「赤い鳥」出版以前にこうした文学的・芸術的にすぐれた創作を生み出したことは注目に値する。(1988／4棚橋

美代子「児童文学事典」東京書籍)

○芸術的児童文学運動の先駆。(1971／2原昌・浜野拓也「新版児童文学概論」樹村房)

以上の文献を挙げた上で、続橋は、明治天皇崩御に伴う社会変革意識と実業之日本社の「少女の友」の求めていた、家族的親愛主義がこの「愛子叢書」精神に繋がった、と見ている。それは「少女の友」や「日本少年」の広告にある「作文のお手本」「面白くて上品」といった表現がこれらの結論のヒントになっている、とものべている。

以上の論にはしかし、質的にこの叢書が五年後の「赤い鳥」爆発にむけての前哨となったことは間違いないが、なぜそこに野上弥生子と晶子が入らねばならなかったかについての言及はない。

この件については未だ推論に過ぎないが、広告に名前があって書かなかった森鷗外、夏目漱石、島村抱月と高浜虚子の意味とも関係あるだろう。つまり、漱石と虚子は木曜会の面子であってその線から言えば野上も木曜会メンバーだ。すると晶子を推薦したのは鷗外か抱月ということになる。晶子は鷗外の観潮楼歌会に明治43年4月から参加しているので鷗外の推挙の線が濃厚だろう。では抱月は何故書かなかったのだろう。彼は批評家なので受けたものの児童文学創作は出来なかったというのが当たっているかもしれない。続論を待ちたい。

いよいよ晶子自身の作品を、解説してみよう。(ほるぶ出版「日本児童文学大系6」による)

①『金魚のお使い』(明治40／6「少女世界」)

甲武線(今の中央線)の新宿に住む、太郎と二郎と千代は駿河台の菊雄さんのところに魚の金魚にお使いに行ってもらう。金魚達3匹を駅までつれて行き、電車にのり、金だらいに水を入れてもらってお茶の水迄乗り、用をたして無事帰って来るといふ話。荒唐無稽な話で金魚が水から出て話をしたり(生き物の擬人化)するところがある意味新



鮮であろう。生物の擬人法の取り入れという面でも注目される作品だろう。

② 『ぼんぼんさん』(明治40/8 「詩人」)

末っ子の茂さんは何故かぼんぼんさんと呼ばれている。花の中からぼんと生まれ、かわいいから、そう呼ばれたらしい。このぼんぼんさんはそのありようをかわいく幼児語を用いてかたっている。事件や盛り上がりは特にない。

③ 『さくら草』(明治44/3 「少女の友」)

お嬢様の千枝子はお父さま(久雄)お母さま(良子)と三人で暮らしている。千代子は重病を患ったあと転地を兼ねてお父さまと京都の叔母さんを訪ねる。小説には書かれていないが、千枝子は実は叔母さんの子どもではないかと思わせる部分が小説の味噌だ。そしてとうとう叔母さんが東京に来ることになって喜ぶ千代子は総てのものを千代子自身も含めて母と叔母さんと共同物(なかま)にしましょう、とお母さまに提案するとお母さまはよろよとしてめまいがしてしまう。それとは言えない怪しい関係、実は本当の母は叔母さんではないかとの想像力を読者は働かされる。実に最後の部分に千代子の言葉に「母様は私を苦しい思ひをして赤ん坊の時から育てて下さった方ですので、私はその御恩を忘れてゐたのですねえ」という部分などそれを感じるのだ。兎に角謎の多い作品ということでは吉屋信子の「花物語」に謎をプラスしたと思わせるような作品を連想させるような良い作品の一つであろう。

④ 『巴里の子供』(大正2/1 「少女世界」)

私がパリで知り合ったお嬢様エレンスさんのかわいい日頃の行ないを詳しくえがいている。エキゾティシズムを好む読者には人気があったらうと思われる。

⑤ 『母と子』(大正7/9 「日本少年」)

母親と息子の回想話。戯曲風な作品で、母と「兄さん」（弟、茂がいるので自分をこう呼ぶ）との対話形式の回想録風の物語だ。

⑥ 『月夜』（大正7 / 10 「少女の友」）

没落した地主だったお幸の家は父、喜一郎は病気で死に、残された母、お近はすこしの畑を耕して生計をたてている。それに姉思いの弟、久吉の三人住まい。お幸も友達の家で女中として勤めるが、前からいる二人の女中に虐められる。仕方なく張り紙にあった郵便配達見習いになろうとするが、条件が15歳以上男子とありどうするかを思い悩む。最後は百姓にでもなろうと決心する。お幸が思い悩んでいた時に女中奉公の帰りに見た月の光は極めて印象的だった。

⑦ 『行って参ります』（大正8 / 5 天佑社）

この作品は後に（大正13 / 11）朝日書房より「藤太郎の旅」として刊行された。藤太郎というのが福徳村の裕福な家庭の子どもでお大（だい）という乳母が寄り添った伶俐な子で春休みにお大をつれて諸国万遊の旅にでているいろいろ体験して帰って来る。先ず（一）では智多山という町の北風という金持ち（藤太郎の家と縁つづき）の家に泊まるが、たまたまそこに泊まりに来ていた初子という少女に騙されてその家で寝込んでいる叔母の頭にさしてあるダイヤのついたピンを盗むが、お大の機転で藤太郎が泥棒にならずにすんだ。（二）では藤太郎とお大が、向が島という島に着くと、妙に歓待される。後から桃太郎組も来るという。どうやら劇団の主役と間違われて歓待されていることに気付いたふたりは次の朝そうそうに船で退散する。（三）では、船で着いた山栗村。その旧家に泊まることになったが、その家主も怪しい詐欺師で、貧乏だといつては藤太郎から金を巻き上げ、耳の遠い振りをさせた村人に金を奪わせ、目の見えない人の振りをさせ金を奪わせ、口の聞けない人の振りをして金を奪わせたが、お大の機転で助かる。（こ

ここでは作品中に不適當な用語使用があったので別の言葉に言い換えています。：論者注）（四）では、次に着いたのは五里ほど先の極楽村の西大寺という寺であった。その住職は藤太郎とは、はとこだった。この住職、藤太郎に食事もさせずに次々お説教を聞かせるので、お腹がすぎ過ぎて、とうとうお大と逃げだす。その途中で古今街の赤犬という人にだまされて見世物小屋に連れ込まれ、働かされそうになる。しかし最後にお大が助けに来てくれて逃げ出す。次にお大が探し当ててくれた親戚の松山さんの家をたずね、その子ども達や親戚の子ども達と島に渡って動物園で遊び、おいしいたべものを食べ帰って来る。結局、藤太郎はあまり大人の国へ入って行き過ぎた、との松山さんの忠告があつて終っている。

以上のように、晶子の童話は創作童話でありながらどこか戯作を継承したり、冒険を意識したり、教訓的だったりする。一方で幼年のかわいさのみをとことん賛美する様は竹久夢二の『春坊』（明治39／11「少年文庫」金尾文淵堂）に似る。童話を書きはじめたのも竹久の影響かもしれない。

### 晶子の童謡

短歌人と同時に詩人であった晶子は童謡も書いている。勿論詩と童謡とは深化という意味で異なるが、晶子は全く自家用に童謡を仕上げている。発表メディアは「少女の友」（『花子の目』大正8／8、『向日葵と花子』同／8、『花子の熊』同／12）だったり「幼年の友」（『ピエロオの木靴』大正9／1、『蟻螂の歌』同／7、『可愛い小蜘蛛』同／8）だったりする。例えば『花子の目』。

あれ、あれ、花子の目があいた  
真正面をばじつとみた。

泉に咲いた花のよな  
まあるい、まるい、花子の目。

見さした夢が恋しいか、  
今の世界が嬉しいか。

踊るころを現はした  
まあるい、まるい、花子の目。

桃や桜の咲く前で、

真赤な風の吹く中で、

小鳥の歌を聞きながら、

まあるい、まるい、花子の目。

花子のまるい目の描写がリフレインを用いることで童謡化されている。そしてその目の感情が詩的には、(形とし

ては) 泉に咲いた花、(内面としては) 踊る心、となつて表現されている。もう一つ。『可愛い小蜘蛛』はどうか。

秋の夕の軒先へ、

蜘蛛は小さな軽業師、

宙に下つて降りてきた。

細い、あぶない、一筋の、

銀の糸をば身につけて、

するり、する、する降りてきた。

月の明かりに照らされて、

蜘蛛は可愛い黄金の色、

光りながらに降りてきた。

空を見上げて、喜んで、

小さい太郎が出した手に、

蜘蛛は平気で降りてきた。

蜘蛛が降りてきた、というリフレインを用いて蜘蛛の挙動を詳しく、焦点をあわせながらに蜘蛛への愛情を発露させた童謡になっている。定型で仕上げたのは前の童謡と同じく短歌出身だからであろう。いずれも自家用であることはまちがいあるまい。

### おわりに

いろいろな意味で晶子の業績は大きい。短歌は無論のこと、詩、古典翻訳、講演会、研究会、吟行などなどその仕事量は並々でなかった。一方生んだ子どもの数は九名。子どもになにもしてあげられない葛藤を関係の雑誌に児童も作品を書くことによって、解きほぐしていたのではなからうか。作品の内容は幼年向けの擬人化を用いた大胆な「金魚のお使い」だとか、お嬢様ながら生い立ちの影や謎をひめた少女の物語「さくら草」だとか、パリのお嬢さんの生活を紹介した「巴里の子供」、回想を母と子で語る「母と子」、没落地主のわずかな仕合せを描いた「月夜」、少年冒険ものと教訓を込めた「行って参ります」など努力のあとが見て取れる。ただこれらの作品が後世に残らなかつた訳は、時代をこえるような大きな要因（例えば、異界やファンタジー、思想などの要因）が作品内に欠如していた一点につきるだろう。